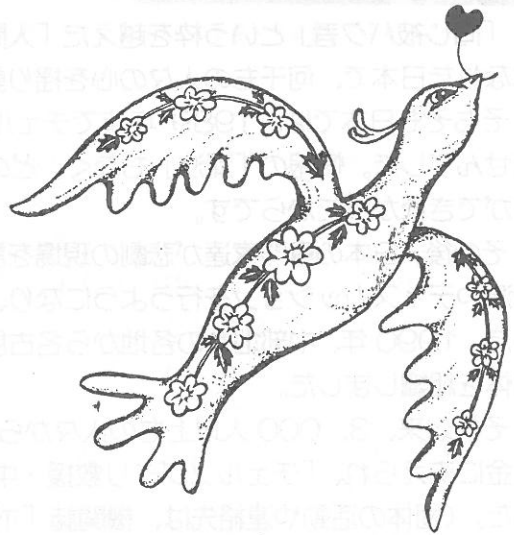




シンボルマークは 鳥とハート！！

著者 オクサーナ・ペトリチェンコ
“トルード（労働）ウクライナ版”
1999年4月30日号掲載分より



チェルノブイリの十字架は、ウクライナに
今も重くのしかかっています。

しかし、世界各地からの支援がなかったな
らば、ウクライナの人々がこの重荷に耐える
ことはまったく不可能だったでしょう。

そのような援助を、現在まで惜しむことなく
続けてくれている国、それは日本です。

日本人が、積極的に私達の国の被災者を支援してくれている理由は、「日本人自身が、
同様の不幸を経験したからだ」と一般的には考えられています。

（「被バク国日本の国民として…」「全世界が、ヒロシマとチェルノブイリの教訓を忘れ
ないために…」・・・私がいただいた本の中には、このような表現がいくつもあります。）

しかし、日本の中部地方は、広島や長崎から遠く離れており、1945年8月のアメリ
カによる原子爆弾投下の被害は、この地方までは及びませんでした。

市民団体「チェルノブイリ救援・中部」のシンボルマークは、

“くちばしにハートをくわえ、飛び立つ鳥”。

このマークのいわれについて私が尋ねたところ、あっさりど答えが返ってきました。
「ウクライナに救援物資を送り始めたころ、ちゃんと目的地に着くようにと、その箱一つ
一つにハートのマークを貼ることにしたのです。」…と。

(次ページに続く)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:30~15:30)



- *向かって左側がオクサーナさん。
- *右端は、おなじみのイリーナさん。
(実は、オクサーナさんの妹です)
- *中央が豊橋の橋本京子さん。
(今回の“ふりいとおく”コーナー
P11 担当)

「同じ被バク者」という枠を越えた「人間同士の愛と友情」が、ウクライナからこんなにも遠くはなれた日本で、何千もの人々の心を揺り動かしているのでしょうか。

そもそも日本では、1989年までチェルノブイリの被害の様子について、ほとんど知られていませんでした。情報の「漏洩」もなく、どのような形であっても、現地とのコンタクトを続けることができなかったからです。

その後、日本の専門家達が悲劇の現場を訪れ、そして帰国して、東京や名古屋などの大都会で、講演やディスカッションを行うようになり、それがさまざまな支援団体の設立のきっかけとなりました。1990年、中部地方の各地から名古屋工業大学に集まった80人の人々も、やはり自分達の団体を組織しました。

それ以来、3,000人以上もの人々から、(それぞれのできる範囲で)定期的に送られてくる寄付金に支えられ、「チェルノブイリ救援・中部」は、私達の国ウクライナに大きな貢献をしてきました。(団体の活動や連絡先は、機関誌「ポレーシェ」によって広く紹介されています。)

私が、名古屋大学で会った生物学者(注:事務局長の河田さん)は、ジトーミル訪問の際に手に入れた、被災者の検診結果の統計等の膨大な書類の山を見せてくれました。

「ウクライナではもう顧みられないこれらの資料を研究・分析することは、被災者に効果的な援助を行う上で、とても大切な事なのです。」

彼の言葉が、心に深く刻み込まれます。

「この資料は、人類すべてにとって、今の生活を見つめなおす大切な教科書です。」

彼らの支援は、ジトーミルの「移住基金」の協力のもと、具体的に、たとえば小児病院への医療機器・医薬品、臨床に対するアドバイス・指導といった形で行われます。代表団訪問の際、そのメンバーの中に必ず医療関係者が含まれているというのも、もっともな事でしょう。

1992年以来、家賃や維持費に余分な支出をせずすむよう、名古屋市内の閑静で目立たない一画に設けられている「救援・中部」の事務所には、日本とジトーミルの子どもの手紙・クリスマスカード・感動的な児童画等が、ところせましと飾られています。

壁には“悲劇を警告するかのように”拡大された「立ち入り禁止区域」の地図があり、部屋には感じの良い善良な人達、そして出入り口のドアには、…くちばしにハートをくわえ、はるか8,000kmかなたの「チェルノブイリ」まで、今まさに飛び立とうとしているあの鳥が…。

お知らせ

昨日（7月3日）の運営委員会において、来年3月（予定）を期して本会を特定非営利活動法人に移行させる（法人化）ことを決定しました。それにもなつて、特定非営利活動法人の正会員を募集いたします。本会の運営に参加する意思のある方はぜひ正会員になって下さいますよう、お願いいたします。

1999年7月4日

チェルノブイリ救援・中部運営委員会
特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部設立者一同

昨年12月に特定非営利活動促進法が施行されました。本会も同法にもつづいて法人化すべきか否か、慎重に検討してきましたが、上掲のお知らせのとおり、法人化することを決定しました。

法人化の意義は、法人名での契約や資産保有が可能になること、法律にのつとつて活動内容を公開することにより社会にたいするアカウンタビリティ（市民活動団体としての活動内容の説明義務）を果たすことができること、これまで私的存在とみなされてきた市民活動団体が公的な存在となること、などにあります。さらに、近い将来に寄付にたいする減免税措置の導入の可能性があること、法人であることが補助／助成を受ける際の事実上の資格要件になりそうなこと、などの実際面での事情もあります。

法人化しても本会の活動の実体はまったく変わりませんし、運営方法もほとんど変わりません。これまで同様、だれでもいつでも気楽に運営に参加することができます。

法人化の主旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。

なお、早速ですが法人化後の本会の正会員を募集いたします。本会の運営に参加する意思のある方はぜひ正会員になって下さいますよう、お願いいたします。同封の「正会員募集の案内」に詳しく説明してありますので、ご検討下さい。

今後の予定	8月末	正会員に設立総会議案書送付
	10月上旬	設立総会
	中旬	愛知県に認証申請
	2月中旬	認証決定
	下旬	法務局登記。法人として再発足

正会員になっていただける方は同封の「正会員申込書」により、8月25日までに事務所まで申し込んで下さい。

1999年7月20日 田中良明

スタディ・ツアーまで いよいよ あと1ヶ月！！！！

参加者は17名になりました。19才から62才まで多彩なメンバーです。
ウクライナ現地の準備も万端！！！！ 現地から、歓迎のメッセージも届きました。

スタディ・ツアー参加者の皆様へ

(移住基金代表 V. キリチャンスキー)

私たち「移住基金」運営委員会は、今ウクライナの地で皆様をお待ちしつつ、楽しい準備にいそしんでいます。日本国民の代表者の方々をお迎えすることは、いつでも私たちにとっての大きな喜びです。また、新たに私たちの国に親しみ、自らの眼で私たちの暮らしをご覧になる方々がいらっしゃるのは嬉しいことです。

皆様のご来訪で私たちの間に友好が深まり、また日本でウクライナを愛する人々が増えるであろう事を確信しております。スタディ・ツアー……それは私たちの国をよく知り、わが国民と交流するためのよい機会です。ですから、私たちはこの企画を立て、実現に取り組んでいる「チェルノブイリ救援・中部」の運営委員会の尽力を歓迎しております。

ほとんど8,000kmの距離が、私たちの間を隔てています。しかし、この距離も私たちの交流の妨げにはなりません。ウクライナへの往路でも、そしてまた日本への復路でも、皆様は私たちの事に思いを馳せてくださるものと思います。ウクライナ流の歓迎が皆様を待っています。勉強もあり、くつろぎのひと時もあるでしょう。ご滞在の期間に限りがある事のみが、私たちの残念とするところであります。ひょっとしたら、ウクライナに残りたくなるかも知れませんよ。そうしていただくと嬉しいのですが…。

ウクライナ講座はいかが？ (大島弘美)

今、ウクライナ講座がおもしろい。

今年は、救援中部でウクライナ講座をしています。

私は最初、「講座＝勉強」と思い、参加しようかどうかと迷っていましたが（私の頭は、勉強には向いていません）。でも、念願のウクライナへ行くのだから、少しでも知識があったほうがいいと考えました。ところがそんな心配は無用でした。

講師の人たちは、わかりやすく話をしてくれるし、何よりも内容が面白い。

料理のときは、美味しかった。楽しかった。ボルシチはもちろん、ジャガイモのケーキやギョウザ（なんとカッターチーズのギョウザ）。これは、目から鱗のおいしさでした。

ウクライナの歌もいろいろ聞きました。なかでも「私は美しい」という歌には驚きました。講師の先生が、「ウクライナで聞くととっても自然に聞こえるのよ」といっていました。きっと、とてもおおらかで、裏表のない素直な国民性なんだと思いました。ほかに、男をだます歌やウオッカを飲みすぎたお嫁さんの歌 etc.、みんな過激な言葉のわりに、思わず笑ってしまう楽しい歌詞とメロディの歌でした。9月にはスタディ・ツアーがあるので、最新の情報も入りそう。ますます面白くなる予感！ あなたも是非どうぞ！！



消防服や車椅子 etc.

船積みコンテナの救援物資が

無事ウクライナに届きました！

5月17日、車椅子・消防服・消防用ブーツなどの救援物資が積載された貨物船が、無事ウクライナに到着し、受け取り手続きが終了いたしました。これらの救援物資は、今後「事



＜贈られた消防服など＞

故処理作業者協会」「チェルノブイリ障害者協会」「ジトーミル市立小児病院」等に配分され、活用されることとなります。「事故処理作業者協会」のチュマクさん、ジトーミル消防局長のアントニュークさんから、救援物資に対するお礼のメッセージが寄せられました。

親愛なる友人の皆様・・・「チェルノブイリ救援・中部」の仲間の皆様へ！

チェルノブイリ原発事故処理作業者（消防士）協会運営委員会は、すでに税関の手続きを終えることのできた人道支援物資に対して、皆様にご心からお礼を申し上げます。

私たちは、既に消防服を使わせていただくことができます。現在、厳しい暑さが続いており、ほとんど毎日のように消火作業に追われている中で、日本の友人の皆様からの贈り物である消防服は大変役立ちます。また、薬品や車椅子についても大変感謝しております。

私たちの協会から、車椅子の一つを事故処理作業者であるポピク氏に寄贈しました。この冬、彼の命は皆様のお金で購入した薬品のおかげで救われたのです。

消防局のすべての職員が、日本国民の方々の誠意と真心を、改めてしっかりと感じることができました。今、私たちの財政事情は非常に厳しいのですが、しかし、この困難に打ち克てるであろうことを私たちは確信しています。

私たちには真の友人たちがいるからです。ドウモアリガトウ！

L. アントニューク【ジトーミル州消防局長】

B. チュマク【チェルノブイリ原発事故処理作業者（消防士）協会 会長】

ジトーミル市にて、1999年7月20日

1999年度も、郵政省ボランティア貯金から

6,170千円が交付されることになりました。

低金利が続く中、徐々に交付金の原資(預貯金の利子)が少なくなり、郵政省「ボランティア貯金室」の担当者の方のご苦勞も多いかと思えます。しかし、今年も私たちの活動が認められ、上記金額を交付していただけることになりました。昨年よりは、約40万円の減額となりましたが、ウクライナの被災者にとっては、かけがえのない支援となります。

ボランティア貯金制度に参加されている皆様に、改めて感謝申し上げます。(J)

『ヴィウコの三つの原真い事』

—逸話（アネクドート）にみるウクライナ—

トゥリフリーブ・アンドリイ（名古屋大学大学院）



1991年ウクライナはやっと独立を手にした。待望の独立はウクライナ人の自意識を強めた。ウクライナ人の自意識は、ロシア人との対立によって表現されていた。

1991年と言えば、政治・経済・旧ソ連の国々の関係・思想が毎日のように変わる状態だった。とはいっても、「当局」の存在の意識を別にしても、何もかも自由に話す習慣にまだなっていなかった。それは、『逸話（アネクドート）』というおもしろい形で、社会的な現象として反映されていた。逸話は、社会のあらゆる面を反映している以上、言語心理学的な現象の枠組みを超えている。旧ソ連時代は、今と比べて、逸話は非常に多かった。政治をからかう「危ない」逸話を、みんなこそこそ互いに話していた。そしてお腹を抱えて笑わなかった人もいなかったと思う。「当局」の人をも含めて、非常に気の利いたものもあったからである。ものをそのまま言えない社会の中で、逸話は唯一の気晴らしだったのではないかと思う。逸話は研究する価値のある、あの時代の極めておもしろい現象である。

そういう時代を背景にウクライナは独立した。反ロシア的逸話、ロシア人のルーズな性格をからかうような逸話は、1991年に一気に現れた。それもウクライナ人の自意識の表現の一つだったのではないかと思う。その逸話の一番大きな特徴は、これらがすべて「ウクライナ語」だったということにある。逸話に出てくる「ヴィウコ」という名前を持った主人公は、頭が良くて、強くてポジティブな人物だった。その名前は、その手の逸話の影響もあって、現在ウクライナ人のシンボルとなっているようだ。

むかしむかし、ある時ヴィウコは魚を釣りに海辺へ出かけた。しばらく経つとヴィウコは何と運が良くて、黄金の魚（誰でも知っている童話の主人公）を釣った。逃がしてもらおう代わりに、魚はヴィウコの三つの願い事をかなえる約束をした。ヴィウコはしばらく頭を搔いていてから、思いがけないことを口にした。「モンゴル軍にスイスまで行って欲しい」。黄金の魚は約束どおりに、願い事をかなえなければならなかった。モンゴル軍はスイスまで行って、大きな被害をもたらした。「では、次の願いは何？」またしばらく考えてから、ヴィウコはこう言った。「またモンゴル軍にスイスまで行って欲しい」と。モンゴル軍は再びスイスまで行って前より大きな被害を与えた。「では、最後の三番目の願いは？」と魚は聞いた。ヴィウコはやがてこう口ごもった…。「モンゴル軍にスイスまで行って、もっと被害を与えて欲しい」。しょうがなく、魚はその願いもかなえた。そして、海へ帰る前に魚はヴィウコに聞いた。「どうしてあなたはこんなにスイスを嫌うのですか？」「だって、モンゴル軍はスイスへ行く途中、三回ともロシアの国土を通過していったじゃないか！」

ロシアの国土を三回通過していったということは、モンゴル軍はロシアにスイスと同じような被害を与えたことを意味している。ロシアに被害を与えて欲しいという気持ちは、ヴィウコの本音の願いだった。だが物事を自由に言える時代ではなく、ロシアは巻き添えになっただけだと見せかけなければならなかったのだ。

逸話の内容は反ロシア的であると同時に、物事を自由に言えない時代と、こういう事情の中でいろいろな工夫をするウクライナ人をからかう逸話だと思う。このような逸話は当時たくさんあったが、その時代とともに過ぎ去ってしまった。

チェルノブイリの子ども達によせる思い

—長良養護学校で今年もカンパー

岐阜の新田さんのところに、長良養護学校の先生から、『『ふれあいの日』に、児童生徒会がチェルノブイリの子どもさんたちのためのカンパを集めました。』との連絡をいただきました。

6月25日に、新田さん・事務局の山盛・松田の3人で、学校を訪問させていただきました。

昼休みの20分間という短い間でしたが、上妻校長先生・福井先生を交えて、児童生徒会長の早川さん・副会長の伊藤さんから「チェルノブイリの子ども達のために集めました。」との言葉とともに、20,383円をいただきました。二人とも、車椅子でしたが、ちょっとはにかみながら私たちを見る澄んだ目が、とてもすばらしい高校生でした。

こちらからは、ささやかな感謝状とウクライナの子ども達の絵と記念品を持参しました。午後の事業が始まった構内を、福井先生のご案内で見せていただきました。明るく清潔な教室は、目的ごとに工夫が凝らされており、充実したコンピュータールームもありました。

昼寝中の小さな子ども達、先生と1対1の高校クラスなど、年令も障害もさまざまな子ども達が、一つの静かな調和の中にいる事がとても印象的でした。

生徒が85名、先生が70名という事で、手厚い保護と教育がなされているともいえるでしょうか。それにしても、隣に岐阜県立の長良病院があり、生徒の4割がそこから通学していることを教えられて、胸が痛みました。

チェルノブイリの子ども達と痛みを分かち合ってくれるこの子たちに、改めて深い畏敬の念をこめて「ありがとう」を言いたいと思います。

(松田)

第11回 愛知サマーセミナーに参加して

(神野 英樹)

7月18日～22日、東邦高校と淑徳高校を舞台にして、愛知県の私立高校生が一堂に会した、「サマーセミナー」が開催されました。私も、若い高校生パワー（もちろん、先生やPTAのパワーもすごかった）を感じながら、市民講座の一講師として参加しました。

2回で延べ40名の受講者があり、全員、真剣なまなざしで受講してくれました。テーマは、もちろん「チェルノブイリの子ども達からのメッセージ」です。

感想文紹介

今回このようなお話を聞くチャンスにめぐりあえて、本当によかったと思います。まず初めに見せていただいた「死のゾーン」という絵が、とても深く印象に残っています。他の子ども達を書いた絵も、みんなそれぞれ身近に起きた現実そのものであり、それを書いた子ども達の心境を思うと、とても切なくなりました。チェルノブイリでは、水も出ない・薬もないという事に悩んでいると知り、そんな状況を見て見ぬ振りをするのは、心が痛みます。だからこそ、今私達が救援してあげなければならない！！と思いました。私も、もっとボランティアに参加して、小さな子ども達を一人でも多く助けてあげられたらいいなと思いました。すべての子ども達の平和を願って…。 (梶山高校2年 N.N.さん)

竹内さんのウクライナ便り

(チェルノブイリ救援・中部 キエフ駐在 竹内 高明)

ベラルーシの国民1000万人のうち200万人がチェルノブイリ原発事故の被災者と認定されており、国土の23%は汚染地域とされている。チェルノブイリ事故後の13年間に、ベラルーシでは1100件の甲状腺(腫瘍)手術が行なわれたが(訳注:ウクライナではこの値は1000件程度)、チェルノブイリ以前の13年間には8件にすぎなかった。汚染地域での妊娠異常は、その他の地域に比べ5倍、不妊は5.5倍。ベラルーシでは放射線許容量はロシア、ウクライナに比べ2倍高く設定されている。経済危機のため、国土の4分の1を農業に使用しないでおく余裕がないのである。事故13年の前日、汚染地域からの移住を打ち切り、汚染地域住民への補助金を減らすという政府委員会の提案が出されたのも、国の予算不足によるもの。86年以後、汚染地域からの移住を待ちながら亡くなった人は5000に及んでいる。98年にチェルノブイリ関係でベラルーシが受けた外国からの援助は市民団体によるもののみであり、その金額は3350万ドルであった(90年には1億1000万ドル)。

(『日々新聞』6/19号)

・天然ガスに関してウクライナのロシアに対する負債は、31億6900万ドル。

(『首都新報』6/29号)

<99.6.11>

ここ数日キエフは30℃くらいの暑さで雷雨などあり、蒸し蒸しと日本のような天気です。きょう追試を一つ行ないに大学へ行きます。その後は26日に4年生の試験が一つあるのみです。私は7月末から8月20日まで日本に一時帰国を考えています。

<99.7.16>

(前略)昨夏に行なってそのまま手をつけるヒマがなかった「キエフの人々」のインタビューをぼつぼつまとめられています。といってもまだ5人分しかないのですが、これをまとめ終えたらさらに続きをやらなきゃいけないのですが。

10月の大統領選の選挙戦がもう実質上始まっていますが、現職のクチマ大統領の支持率がそれほど高いとは思えないのですが、他の大統領になったらもっと経済が悪化するんじゃないかという消極的支持なのでしょう。

最近キエフの日本人を対象に強盗事件や詐欺事件が発生しているようですが、被害にあった人たちはこちらの平均から見ても明らかに裕福な人たちで、私風情はまず標的にはならないと思われまます。日本人のみならず外国人対象の犯罪が一般に増えているのであるならば、キエフも治安が悪くなってきてモスクワに近づいているのかも知れません(そうは思いたくないですが)。

<99.7.26>

7月31日午前成田空港着のチケットを入手しました。豊橋、名古屋で一週間は過ごそうと思います。それから奈良、大阪、岡山、広島に行き、8月20日には成田を立ち、8月21日キエフに戻る予定です。ヴィザについてはとりあえず9月20日まで延長されました。



4/20 今日、奨学金問題について、私達の意見を述べます。運営委員会での議論の結果、私達は次のような結論に達しました。

- ① 計画の名称は、「チェルノブイリ奨学基金」とする。
- ② 計画は、チェルノブイリ事故の13周年記念日の4月26日にスタートする。
- ③ 応募者は、ジトーミル州に住む事故処理作業員または汚染地域住民の子どもとする。(経済的に苦しくて、受験できない生徒を対象とする。)
- ④ 医学専門学校・医科大学・語学専門学校を志す生徒を対象とする。(以下略)

4/21 奨学基金の名称には、全面的に賛成します。あなた方の新しい計画の目的を良く表していますから。しかし、応募資格者は、大学に入学している1年生を対象とするべきだと考えます。(こちらのシステムでは、生徒は、大学で1年間勉強してから専門を選択しますし、何より選考作業が大幅に楽になるからです。) この事業は、私達にとっても全く新しい分野です。お互いの意見をもっとぶつけ合い、最適の答えを見つけましょう。

5/10 応募者の選考方法についてのあなた方の提案に同意することにしました。しかし、これは今年だけの試行としましょう。私達にとっても経験がないのですから。もう一つ、運営上の管理費用については、もっと切り詰めて全体の10%以内に抑えてください。できる限り、学生のために役立てたいのです。この新しい事業に関して、ほぼ合意に近づきつつあることを嬉しく思います。

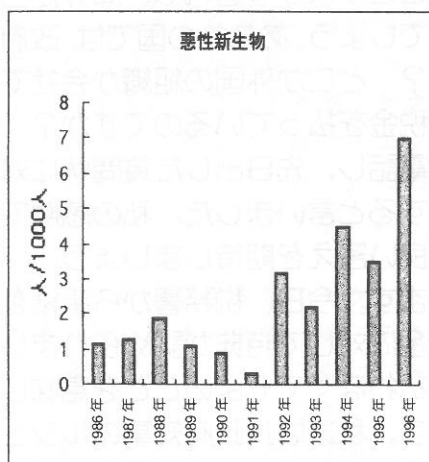
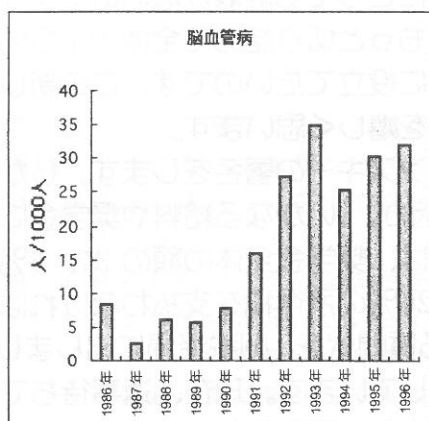
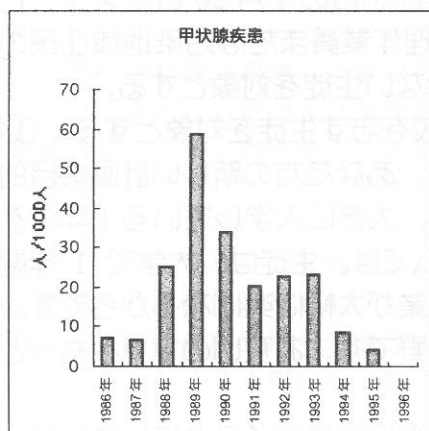
6/2 奨学基金の契約書と付属文書に、キリチャンスキーの署名をします。しかし、私達は今、大きな問題に直面しています。政府が、「いかなる給料や奨学金にも課税する」と明言したからです。ウクライナでは、奨学金全体の額の37.5%です。さらに、受け取る奨学生もまた、1.5%と20%の所得税を支払わなければなりません。私達は、この事について説明を求める質問状を、州税務局に出しました。これは、慈善のための基金であると強く主張しています。現在、返事待ちです。

6/10 奨学金に対する税金について、私達はこのような理不尽なシステムについて、誰もが驚き、憤慨しています。もしこうしたことがまかり通れば、海外からあなた方の学生を援助する人は一人もいなくなるでしょう。あなたの国では、政府自身が学生の奨学金に税金をかけているのですか？ どこか外国の組織か会社で、あなた方の学生のための奨学金なのに、本当に税金を払っているのですか？

6/11 今日、州の税務局に奨学金の税金のことで電話し、先日出した質問状に対する返事を聞きました。彼らは、来週文書で回答すると言いました。私の感触では、彼らの決定はポジティブ(良い方向)です。良い答えを期待しましょう。

6/16 とても急ぎの、良いニュースをお知らせします。今日、税務署から手紙を受け取りました。チェルノブイリの孤児は、奨学金に対して特典が認められました。この事は、政府に37.5%と1.5%の税金を払わなくてもよいことを意味します。残る問題は、奨学生が支払う20%の税金です。私達は州政府知事のルシュキン氏に対して手紙を書く準備を進めています。(注:このあとも州政府との折衝は続き、ジトーミル州内の大学生に関しては、税金が免除される事となりました。)(J)

移り変わる疾病構造



ここにあげるデータは、ウクライナ・科学アカデミーのコンピューターに登録されている、汚染地域、いわゆる 30Kmゾーン内で働く労働者の各年度毎に新規に発生した病気の移り変わりを現している。対象はチェルノブイリ原発で働く作業員（現在約 5500 人）、事故処理に携わった作業員、各種行政機関で働く人々など、77258 名である。これはゾーン内の総ての労働者ではなく未登録の数もあるようだ。沢山のデータの中から、左記の3種類について挙げるのは、現在問題の病気が何かを明らかにするためである。チェルノブイリ事故後、最も早く深刻化した甲状腺関連の疾患（ガンを含む）は、少なくとも大人の新規発生数で見ると1990年頃にピークに達し、以後は漸減していることが分かる。これは広島・長崎の場合とは異なる。代わって激増しているのは、脳血管病、つまり脳溢血や脳卒中などである。高血圧も増加している。

これらの被曝との関連はさらに調査の必要があるが、5レム以下の被曝者群とそれ以上の群では明らかに大きな差があり、被曝との関連が強く示唆されている。事故処理作業員との面接調査でも、多くの作業員がこうした脳血管病を抱えていることは周知の通りである。また、各種悪性腫瘍（左図）や胆のう炎、胃炎など消化器病も近年増加しており、深刻な事態となっている。広島・長崎の経験に加えて新たな研究が必要である（河田）。

下の詩は、97年5月に「チェルノブイリ救援・中部」のメンバーとしてウクライナを訪れた後に書いたものです。

このときの訪問は、事故処理作業員の聞き取り調査、移住者の村の生活状況調査、そしてナロジチ病院の給湯設備工事完了確認が主な目的でした。

メンバーは、前回のスタディツアー参加者や専門家として、今までに何度も訪わされている方々でしたが、私にとっては、初めてのウクライナでした。どこも、人・風景それぞれに、今でも強く印象に残っていますが、一番最初に訪れたナロジチは、特に強烈でした。

5月は、カシタン（マロニエ）、ライラック、林檎、スズラン、タンポポなどの花ざかり。

子ども達が遊ぶ広大な公園の一隅に建てられ



＜ナロジチの町にて＞

た「悲しみの母子像」の前で、私は涙が止まらなくてとても困りました。

緑あふれる肥沃な大地が、目に見えない放射能で汚染され続けている事実を、言いようのないやるせなさでいっぱいになったのです。

1年後、映画「ナージャの村」を観ました。ベラルーシ・ドゥチチ村、この美しい四季の映像とナロジチが重なりました。そして、11年前、廃墟となった徳山村（保証金を得た条件は、家を焼き払って村を出ることだった。）を訪れた時の、コスモスの乱れ咲く秋の屋下がりも思いに浮かびました。

私達が美しいという自然とは何なのか？ 自然とともに豊かな営みを続けている人々と、自然と引き換えに別の豊かさを求める人々…。この境界線はあるのでしょうか？

（橋本 京子）

ナロジチ

—花ざかりの町—

花ざかりのカシタンの並木道を
ベビーカーを押した二人の若い母親が
私の向けたカメラに微笑を返してきた
緑深い公園の樹々の間から
子ども達の影が見えかくれする

ナロジチ チェルノブイリから六十キロの町
第二種ゾーン汚染地域

この町の出生率はウクライナで最も高い
子どものいる家庭に移住の優先権があるから

ナロジチ総合病院では きのうもひとつ
新しいいのちが誕生したという

原発事故から十一年
人は汚染された大地を耕し 牛や鶏を飼う

病院内の視察の間中
いくつかのドアから

小さな顔を出していた院長の孫娘が
「庭に咲いていた」と

はにかんで手渡してくれた 忘れな草
ウクライナの澄んだ五月の空と同じ 青

私はチェルノブイリを決して忘れない

事務局便り

7月某日、午後。9月のスタディツアーに参加されるKさんが、事務局までパスポートを持っていらっしまいました。Kさん(男性)は、ヨーロッパは初めてなので、気候や食べ物にはちょっと不安とのこと。しかし、チェルノブイリ現地に行くことへの、大きな期待と意気込みが感じられました。

夕方、中津川のOさんがいらっしまいました。Oさん(男性)は、9年前に中津川で「チェルノブイリの子ども達の絵と107通の手紙展」を開き、チェルノブイリ救援・中部の9年間の活動の歴史の一コマを担ってくださった方です。昨年は事故、今年は病気で入院というご難続きの中でも、今の職業(タクシーの運転手)から来たるべき【介護福祉時代】への対応も考えていらっしまいます。「がんばってください」という事務局一同に、「できる事でボランティアさせていただきます。」とありがたい申し出。私たちがの方が励まされる思いでした。「救援・中部」9年間の〈生き証人〉は、まだまだ沢山いらっしゃるはず。時々遊びにきてください。ご来訪をお待ちしています。(松田)

読者の声

- *全国的に梅雨入りとのこと。生命あるすべてのものに恵みの雨となることを思いつつ。ふと、13年前のチェルノブイリの事故の後、幼かった子ども達に「雨にぬれてはだめ！」と叫んだことを思い出しました。皆様の息の長い活動に感謝しています。天候不順の折、お身体に気をつけて。(東京都 S.M.)
- *白血病でしたが、昨年骨髄移植できました。少しでも、お役に立てば幸いです。(福山市 S.T.)
- *いつもポーシェが届くのを楽しみにしております。尊いお仕事に、少しでも協力できればと思います。(豊川市 Y.O.)

6月1ヶ月(6/1~6/25)だけで、72件(1,559,738円)ものカンパをいただきました。その振込用紙の多くに、上記のような短い励ましの言葉が添えられています。事務局スタッフ一同の、元気の源です。いつも本当にありがとうございます。(J)

編集後記

- ・政治も経済も混迷するウクライナ。アメリカは銃で痛み、日本でも失業率4.6%。我が家の大学生も求職中。とにかく、若者が元気に生きられる社会になって欲しい。(京)
- ・4月にスタートした身体障害者療護施設「杜の家」で、7月10日に「七夕まつり」が行われた。予想をはるかに上回る参加者で会場は大賑わい。施設利用者有志の方が、出店したチェル救に「これからも続けますよ」とカンパをくださった。嬉しかった。(美)
- ・「日本列島改造」の掛け声のもと、粗製乱造で造られた「ビル・トンネル・高速道路」からいろんなものが落ちてくる時代になった。老朽化した原発は？と思っていた矢先に、敦賀原発2号機で冷却水漏れ事故が発生した。私たちは、目の前の原発を容認している限り、「チェルノブイリの悲劇」を学んだことにはならない。(J)